

「開館十周年記念 所蔵資料特別企画展」開催にあたって

二〇〇六年十二月一日に、十三年という建設努力の長い時を経て、また、戦没学生の遺稿集『きけわだつみのこえ』の初版刊行

(一九四九年) 以来の多くの読者・支持者のご協賛を得て開館できましたことは言葉に尽くせない喜びでありました。それから十年、ここに「十周年記念 所蔵資料特別企画展」を開催できますことはさらに感慨深いものがあります。

「わだつみのこえ」をいかに聴き、戦没学生の遺念を受け止めて平和をつくるいとなみにつなげるかという課題に立ち向かってたゆまず歩んできた十年でもあります。これもひとえに皆さまの厚いご支援のたまものと深く感謝申し上げます。

開館の折にご寄託いただいた遺稿・遺品・遺影は、『きけわだつみのこえ』収載の方々のみでしたが、この十年の歩みの中で、『こえ』以外の方々からもご寄託をいただき、現在では六九名(コピー含む)、約一五〇〇点を所蔵するに至りました。

このたびの「所蔵資料特別企画展」では、お一人数点に限って展示し、図録に掲載いたしました。会場スペースの関係で三つの時期(日中戦争期、太平洋戦争期、「学徒出陣」期・戦後)に分けて展示、また掲載しております。所蔵全体のリストは、「紀要」第

二号で公開いたします。

家族への愛、学問への志断ちがたく、戦争への疑問を持ちながらも、時代の奔流に身を投じていった青年たちの魂の叫びに耳を傾け、沈黙する声を聴きとってほしい、また、民族を異にしながらも大日本帝国に徴集された元朝鮮人学兵の苦悩と受難にも思いを馳せて、「もう一つのわだつみのこえ」(姜徳相)を聴きとってほしいとねがいます。

「ふたたびわだつみの悲劇をくり返してはならない」という決意を後代に伝える記念館としての歩みをこれからも着実に重ねてまいります。変わらぬご支援をお願い申し上げます。

遺書・遺品を大切に保存されご寄託くださいましたご遺族およびご友人の方々、またこのたびの展示にご協力くださいました諸団体の皆さまに厚く御礼申し上げます。

二〇一六年十一月四日

わだつみのこえ記念館 館長 渡辺總子

| | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 「開館十周年記念 所蔵資料特別企画展」開催にあたって | 1 |
| 戦没学生の遺稿 | |
| 1 日中戦争期を中心に（展示期間：11月4日～11月14日）..... | 3 |
| 渡辺直己 篠崎二郎 田村正 戸谷敏之 松永茂雄 田辺利宏 松永龍樹 小倉正大 大島欣二 浅見有一 岩田譲 柳田陽一 横山末繁 北川智 奥村克郎 宅嶋徳光 吉村友男 林尹夫 佐々木八郎 原亮 山隅観 中尾武徳 松岡欣平 金綱克巳 | |
| 2 太平洋戦争期を中心に（展示期間：11月16日～11月26日）..... | 32 |
| 篠崎二郎 田村正 永田和生 木下浩 小倉正久 浅見有一 長門良知 中村徳郎 関口清 柳田陽一 宇田川達 上村元太 奥村克郎 石岡俊蔵 宅嶋徳光 海上春雄 竹内浩三 吉村友男 林尹夫 長谷川信 上藤憲三 佐々木八郎 池田浩平 原亮 上原良司 山隅観 大塚章 中尾武徳 鷺尾克巳 岩ヶ谷治禄 鈴木康三郎 松岡欣平 板尾興市 金綱克巳 山根明 塩見昭 | |
| 3 「学徒出陣」期・戦後を中心に（展示期間：11月28日～12月7日）..... | 68 |
| 田村正 戸谷敏之 大島欣二 小倉正久 木村久夫 長門良知 中村徳郎 関口清 井上淳 林憲正 宇田川達 奥村克郎 石岡俊蔵 白井成徳 宅嶋徳光 海上春雄 林元一 市島保男 吉村友男 大塚晟夫 林尹夫 長谷川信 上藤憲三 原亮 上原良司 田中敬治 中島愛作 山隅観 大塚章 鷺尾克巳 岩ヶ谷治禄 鈴木康三郎 松岡欣平 金綱克巳 稲垣光夫 山根明 | |
| 戦没朝鮮人学生関連資料 | 100 |
| 卓庚鉉 韓聖洙 盧龍愚 趙文相 | |
| 年表「中国侵略からアジア・太平洋戦争へ」 | 102 |
| 戦時学徒必携「大東亜」略図 | 103 |
| 凡例／出品・協力者のお名前 | |

戦没学生の遺稿

1 日中戦争期

日本の中国への侵略は、一九三一年の柳条湖事件による満州占領から新局面に入り（満州事変）、三七年に盧溝橋における衝突から日中全面戦争となった。緒戦で軍事上優位に立った日本軍だが、確保できたのは点と線（都市と鉄道）だけで、広い地域の住民を支配することはできなかった。しかも戦時国際法を無視して略奪・暴行・虐殺行為を繰り返す日本軍に中国民衆の反感は増大する一方だった。



わたなべ 渡辺

なつき 直己

1908年(明治41)6月4日生。
広島県出身。
26年(大正15)4月、広島高等師範学校
文科第一部国漢学科入学。
30年(昭和5)3月、広島高等師範学校
卒業。
31年2月、幹部候補生として陸軍広島
歩兵第11連隊に入営、同11月除隊。
31年12月、呉市立高等女学校教諭に
なる。
35年1月、アララギ会入会。
37年7月、充員召集により、陸軍広島
歩兵第11連隊補充隊に入営。
37年11月、天津着。
38年7月、天津から華中に転戦。同年
12月、天津に戻る。
39年8月21日、官舎の浸水による石灰
爆破により死亡。戦死扱いとなる。
享年31歳

渡辺直己『陣中日記』

一九三七年一月二三日〜一九三八年一月三十一日

十二月十六日／霧が降ってゐる。三木中尉と二人で補充兵二十五名を連れて耐寒六里行軍だ。各人実包十五発。戦備行軍だ。南開中学から日本租界へ出、天津神社に参詣。白河に沿うて仏租界を右に万国橋を渡る。苦力の群が陸にも川にも溢れて支那は意識なく大河のやうに流れてゐる。戦火に傷められ敗戦の烙印を捺され屈辱を余儀なくされてゐても動いてゐる。鈍重に低級に無自覚に蚯蚓のやうに生きてゐる。(一九三七年一月一六日)

渡辺直己『渡辺少尉手簿』

一九三八年二月一日〜五月二五日

三月十一日／思考と云ふ事を極力怖れてゐる自分の意識をふと見出して耐らなく寂寥を感じる。無常とか変転とかがこんなに切実に身に沁みて感じられる事もない。北支聖戦の下にボヘミアンの深い孤独と興奮と痴呆的状

十二月十六日
霧が降る。三木中尉と二人で補充兵二十五名を連れて耐寒六里行軍だ。各人実包十五発。戦備行軍だ。南開中学から日本租界へ出、天津神社に参詣。白河に沿うて仏租界を右に万国橋を渡る。苦力の群が陸にも川にも溢れて支那は意識なく大河のやうに流れてゐる。戦火に傷められ敗戦の烙印を捺され屈辱を余儀なくされてゐても動いてゐる。鈍重に低級に無自覚に蚯蚓のやうに生きてゐる。(一九三七年一月一六日)

態とが狂ほしいまでに錯綜して来る。死とか絶望とかそんなものはなるべく考へたくない。そして只現在と未来との白白とした瞬間に生きてる頼るだけだ。思索を奪はれて野獸のやうな獐犇性に生きて行く生活、時に青い空を見て自己自身を悟る時慄然として来る。

(一九三八年三月一日)

三月十一日
思ふと少少と精力が少なくなつて来た。死とか絶望とかそんなものはなるべく考へたくない。そして只現在と未来との白白とした瞬間に生きてる頼るだけだ。思索を奪はれて野獸のやうな獐犇性に生きて行く生活、時に青い空を見て自己自身を悟る時慄然として来る。

渡辺直己『手簿2 ノートブック』

一九三八年五月二六日〜七月一六日

「前略」漢口進撃を思つて又新しい自慰と興奮に駆られる。妻もなし子もなし未来に大きな希望もない自分、今戦死すれば約一百万の金は残る。すると両親と弟との生活も大体保証されるだらう。死んだって別に恐しくも悲しく

もないのだが、既に歌では無名歌人として少しは知られる位になつたし俺位幸福な道を歩いて来てる者も少いのだ。漢口の月を仰いで激しい弾の中を疾駆するのも又痛快な所があるだらう。俺を憎む人達の中にも俺を愛して呉れる少数の人達もあるんだ。死が生物学的な一つの事件である以上、自分はそれに対して人間の己惚れも空虚な価値づけもしようとは思はない。帰つて肉親に会ひたい、友に会つて共に心ゆくまで語りた、それは勿論だ。が結局は空漠たる人生ではないか。希望は白雲のやうに消えて行くものであり未来は結局平凡な現実の羅列にすぎないのだ。老いた父母に幸福に暮らせるだけの物質と弟の未来の為に一つのより所を残してやれば今の自分としてこれ以上のものはないのだ。死、嫌な終焉を意味したこの言葉もつきつめて考へた時そんなに恐しいも

のではない。黒部峡谷で去年の夏死んだと思へばいいだらうし台児荘(山東省南部の町)で爆死したと思へば諦められよう。悲しみも五年経てばいつか淡らんで行く。父母の心を思ひ兄弟弟の悲しみを思ふと断腸の思ひもあるが僅か二十年圧縮されたと思へば好い。既にハイキング好きの自分は北支(中国北部)の冬と春と夏を見た。揚子江の流れと漢口の空を見る事が出来るのは望外の悦びと云はなくてはならない。覚悟は決つた。力が勃々と湧いて来る。筆を投じて剣にかへる自分の姿を見て涙ぐましい感慨が湧いて来る。どんなニュースが入つてもびくつかない。空しい凱旋の噂に踊るより進んで敵陣に猛烈な攻撃を続ける方が愉快だ。(一九三八年六月一日)

篠崎 二郎

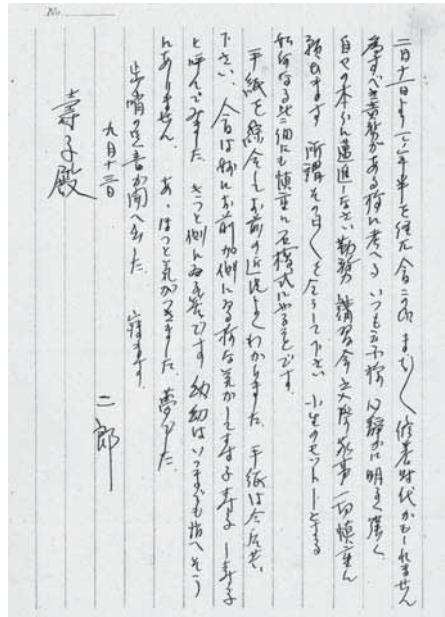


- 1910年(明治43)3月2日生。
- 奈良県出身。
- 同志社大学予科を経て、31年(昭和6)、同文学部英文学科学進学。
- 35年卒業。新聞記者記者を希望するが果たせず、大阪市立東第二商業学校の英語科の教員となる。
- 37年2月、結婚。
- 37年11月、大阪逓信局通信講習所英語科教官となる。
- 38年4月、補充兵として応召、奈良の陸軍歩兵第38連隊に入営。
- 38年8月、南京の中支派遣軍岩松部隊司令部付となり、新聞班に配属。のち警備班に配属。
- 40年1月、前線に配置され、討伐戦に参加。
- 40年5月、召集解除。
- 41年1月、女兒誕生。
- 41年8月、再度応召。
- 41年9月、平壤の尼崎隊に所属。後、南海派遣軍に属し、東部ニューギニアに転戦。
- 44年1月18日、東部ニューギニアにて戦死。
- 享年33歳。

篠崎寿子宛篠崎二郎書簡

一九三八年九月一三日付

〔前略〕手紙を綜合してお前の近況よくわかりました。手紙は今后共下さい。今日は妙にお前が側にゐる様な気がして寿子寿子—寿子と呼んでみました。きつと側にゐる苦です。幻はいつまでも消へそうにありません。ああほつと気がつきました。夢でした。／歩哨の足音が聞へ出した。寝ます。

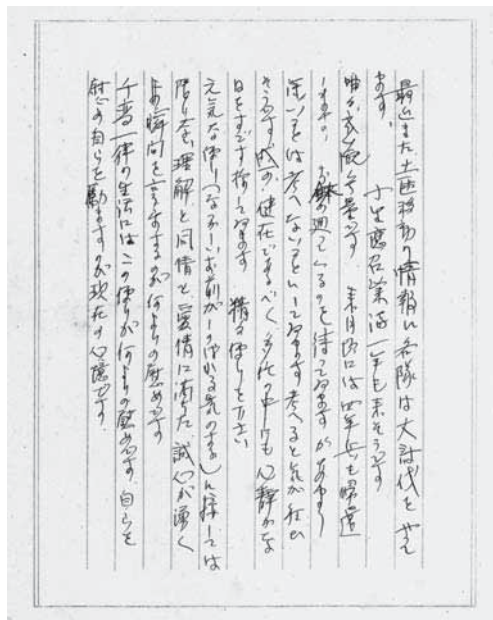


篠崎寿子宛篠崎二郎書簡

一九三九年四月六日付

〔前略〕最近また、土匪移動の情報に各隊は大討伐をやっています。小生応召以来満一年も来そうです。唯々感慨無量です。来月頃には四年兵も帰還します。お鉢の廻ってくるのを待っています。考へるがあまり深いことは考へないことにしてゐます。考へると気が狂ひそうです。成可健在であるべく、多忙の中にも心静かな日を過ごす様にしてゐま

す。精々便りを下さい。元気な便り(なつかしいお前がしのばれる気のする)に接しては限りない理解と同情と、愛情に満ちた、誠心が湧く瞬間を享樂するのが何よりの慰めです。千変〔篇〕一律の生活にはこの便りが何よりの慰めです。自らを慰め自らを励ますのが現在の心境です。



篠崎寿子宛篠崎二郎書簡

一九三九年四月三〇日付

〔前略〕四月二十日付で上等兵に進級した。(応召以来満一年の日、補充兵では一番上級、下士、将校は希望から別。)同年兵は中隊で現在五十名、その中六名中の一人です。中隊を離れてゐるが本部要員の激務に耐へた奏功の結果です。これからはどこへ行つても今迄の様なつまらぬ苦勞はしない。初年兵当時を思へば感慨無量です。あの頃はよく古年兵のフンドシ、シャツ類を皆でとり合つて、洗濯しないと悪かつたが、これからは洗濯、縫物、食器洗ひは皆、人がしてくれる。一寸きまりも悪いが軍隊の鉄則だ。そのかはり又勤務の上では責任がある。(大したことないが)とにかく、本部では、目立たぬが中隊など

帰れば相当なもの。又小生の張り切り方も一通りでないが、然し例の体刑だけはしない。あくまでおだやかに取扱つてやる。(体刑とは上靴で頬を五六つなぐる例になつてゐる)

